小松の黎明（れいめい）

二万年前の後期旧石器時代に狩猟具の槍先として使用されたナイフ形石器や尖頭器（せんとうき）が八里向山（やさとむかいやま）遺跡から出土しており、小松における人類の最初の足跡をたどることができる。二万年前は最終氷期のビュルム氷期にあたり、現在よりも気温は約一〇度低く、海水面は一二〇メートル

後期旧石器時代のナイフ形石器（八里向山遺跡）

尖頭器（八里向山遺跡）

槍先の推定復元図（「旧石器の文化」『いしかわの旧石器・縄文時代』平成14年）

念仏林遺跡の大型竪穴建物の調査風景

以上低かったと考えられている。

日本列島では一万五〇〇〇年前に土器が出現し、日本史ではこれ以後を縄文時代としている。一万年前からの完新世には気候は温暖化してきており、七六〇〇～六八〇〇年前（縄文時代早期末～前期初頭）にもっとも温暖化した時期をむかえ、それ以降、現在の自然環境と大きくは変わらなくなった。

縄文時代中期の土器（念仏林遺跡）

弥生時代前期の土器（左：地元の土器、右上：外来の壺形土器、八日市地方遺跡）

五五〇〇～四五〇〇年前（縄文時代中期）には念仏林（ねんぶつりん）遺跡や中海遺跡、六橋（ろっきょう）遺跡のような集落が営まれ、遺跡数が増加してくる。念仏林遺跡では長さ八～一一メートルの楕円形の大型竪穴建物が発見されており、これは七二〇〇～五五〇〇年前（縄文時代前期）に東北地方でよくみられる建物で、中期の初めになると北陸地方に南下してくる。

今から二九〇〇年前に朝鮮半島から九州北部に水田稲作農耕が伝わり、日本史ではこれ以後を弥生時代としている。弥生時代の文化が弥生文化で、これは伝統的な縄文時代の文化に朝鮮半島から伝播してきた水田稲作農耕文化が融合したものである。八日市地方遺跡は北陸を代表する弥生時代の集落遺跡の一つである。

（山本直人）

（写真の提供、対象物の所蔵は小松市埋蔵文化財センター）